

下種に関する一考察

——聞法下種における化導の論理——

平 島 盛 雄

日蓮聖人は誹謗正法の末法衆生の救済を下種という理念に集約しそれを実践された。このような法華経違背の下根下機に對して説かれる日蓮聖人の下種論を古来より逆縁下種と稱し、凡夫成仏の問題として重視されてきている。もっとも、逆縁下種とは下種を蒙る衆生の信行のあり方に約してそのように表現されるのであり、基本的には法華経聞法による下種ということが要点となっている。つまり、日蓮教学における逆縁下種の課題は、天台教学のいわゆる聞法下種へと問題が遡源されてくるといえる。したがって、日蓮聖人の末法下種論を考察する上において、天台教学の聞法下種概念を明確にすることは基礎的作業であるということができる。ところが従来の下種論の研究では、聞法下種という表現が未だ抽象的なものであるにもかかわらず、それに対する理解は表面的なものに止まっているように思われる。聞法下種概念を実践的に表現するならば、法華経を聞法することによって衆生

が具体的にいかなる利益を得ることができるのか、という問題にまで説き及ばねばならないと考える。そこでこのような観点に立つて、天台本末釈に説かれる具体的事例から仏種概念を総合的に判断してみると、下す仏種とは法華経であり、下される衆生に約せば智慧である了因仏性と実践修行たる縁因仏性が仏種の義になることが確認できる。（立正大学『大学院年報』第二号）小稿はこのことを踏まえた上で、仏種として規定された法華経と衆生の縁了仏性とがいかなる論理によって有機的な関係を示しているのかという問題について考察する。換言すれば、たとえそれが無意識的なものであるにせよ、法華経を聞法するという機縁を媒介として法華経にかかわる主体が、仏種である法華経のいかなる化導の論理によって仏陀釈尊の慈悲を確信するにいたるのか、ということについて考えることである。この作業によって、逆縁下種の根拠である聞法下種の要点を明らかにすることができるであ

ろう。

そこで、逆縁下種が説かれる『法華文句』の不輕品釈義にその要義を求めると「毀者得善惡兩果。謗故墮惡。聞三仏性名毒鼓之力獲善果報。」（中略）經有大力終感大果」（『正藏』三四卷一四一b）という説示が見られる。すなわち、法華經に対する毀謗は墮獄という惡果を受けることになるが、仏性常住の經意を聞くことはそれが毒鼓の縁となつて後に善の果報を獲得することになると説き、その根拠を法華經の有つ力用に認めるのである。このことから、法華經聞法と善の果報との必然的連関性は、法華經の經力に視点を置いて理解されているということができよう。またこれと同様の主張を法師品の『文句記』に見ることができる。『正藏』三四卷三〇五b）そこでは、遠い過去に法華經を聞法したことによる善根に藉つて現在の發菩提心があることを説いている。そしてその必然的連関性を充たす要因は法華經そのものの機能にあるとし、法華經ないし法華經聞法による善根の超勝性を力説するのである。

このように、天台本末釈の中では、法華經聞法と、それに藉つて起る智慧の發揚および実践との必然的連関性は、法華經の有つ經力あるいは法華經の機能という概念によつて理解されていることが確認できるのである。しかしながら、法華經の經力・功能等の用語は抽象概念であつて、法華經の用玄

義を充分に表現しているとはいえない。そこで、それらの用語とは異表現でありしかもその思想概念を充分に表明していると思われる、次の文を指摘したい。「無偏至真如智宝也」。此是約教乃以了因而為繫珠。教中詮理故云真如。一教是智用故云智宝。約受化者。教能生智亦名為智。宝有二義。俱是智家之宝。」（『正藏』三四卷一〇七a）これは衣裏繫珠の譬えを大通法華覆講下種に約して説いたもので、大通下種の仏種に関する消釈である。すなわちこの文はまず、真理を説くが故に法華經が仏種であることを指摘する。次に、受化の衆生に約せば智慧である了因仏性が仏種になることを指摘するのであるが、そこには「教能生智」という考えがあることに留意しなければならない。つまり、法華經は仏智を以つて如来の眞實を顯説した教であるが故に、法華經そのものに衆生に智慧を誘發させる力があるというのである。ここに、法華經を聞法することによつて衆生の智慧が發揚するという論理の必然性は、「教能生智」という天台一流の思考によつて解決されていることを知るのである。そして、智慧の發揚がさらには具体的実践へと昇華するという考えは、道理であるが、その典拠を出せば『玄義疏』の修性不二門に示された「性雖本爾藉智起修」（『正藏』三三卷九一八c）とする文を明証とすればたり得るであらう。これらを要すること聞法下種における化導の論理として、法華經を聞法すること

は如来の眞実を知ることであり、それがすなわち現実の智慧となり具体的実践へと昇華する、という関係を指摘することができよう。

以上、甚だ粗雑ではあるが、天台教学における聞法下種の論理構造について考察してきた。いまそこに理解された凡夫成仏の論理について確認するとおよそ次のようになる。

まず、仏種として規定された法華經という教法と衆生の縁了仏性とは、法華經聞法という機縁を媒介として、そこに有機的な関係をもつことを示しているということが出来る。それは、「下種」という思想用語が、「仏種を下す」ことを意味するものであると同時に、「仏種が下される」ということをも示しているからに他ならない。すなわち、「仏種を下す」という能動的な意味での仏種は法華經であり、「仏種が下される」という受動的な意味での仏種は現実における衆生の智慧であり具体的実践であるといえる。

そして、このような両者の関係を法華經聞法を媒介として成立せしめるものは、「教能生智」という天台の法華經觀にあつたと考えられるのである。これは、教法の有つ用玄義に視点を置いた、法華經の余教に対する絶対性、超勝性の表明に他ならない。すなわちここに、三種教相の第二に化道の始終を説き、「下_下以_下余教_上為_上種」とした理由が存するものと考ええる。

下種に関する一考察(平 島)

なお残された課題として、日蓮聖人がどのようなかたちで聞法下種の論理を受容されたか、という問題がある。聖人は『八宗違目抄』、『観心本尊抄』等の中で、三因仏性が本有であることを説く教は法華經に限るとして法華經が仏種であることの所以を明かし、そこに法華經の絶対性を指摘されている。また『観心本尊抄』の中では、妙法五字が仏種であることを主張されるのである。このことは、日蓮聖人の下種論における「仏種を下す」という意味での仏種が、法華經あるいは妙法五字であることを示唆している。しかしながら、「仏種が下される」という意味での仏種を考えた場合、「教能生智」という天台の法華經觀にもとづく聞法下種の要点を、日蓮聖人がいわゆる「以信代慧」の立場からどのようにに理解されていたのかということが重要な課題となってくるであろう。尚、この問題に関する詳細は後日を期す。

(1)「聞法」とは法華經の何を聞くのかということが問題になるが、天台本末釈の中には「仏性名」「本有理」「常住」等の表現が見られることから、「仏性常住の理」であることが予想される。しかし乍ら「仏性常住」に関しては法華經よりもむしろ涅槃經が積極的に説くところである。したがって、法華經の聞法下種を表現するときに「仏性常住の理」という思想用語を使用することが適当であるかという問題は、さらに検討しなければならない。

(立正大学大学院)